

「満ち満ちて」

—初稿—

2025/12/7

へ人物表へ

アイカ (30)

自殺グループのメンバー

コージ (34)

自殺グループのメンバー

フジ (50)

自殺グループのリーダー

ハナ (43)

自殺グループのメンバー

ミヨウジン (39)

自殺グループのメンバー

1. 山道の中腹・駐車スペース(夜)

山道沿いの小さな駐車スペース。

車通りは無く、街灯もまばら。あたりは薄暗い。

バンが一台だけ停車していて窓の灯りが漏れている。

2. 車の中(夜)

ルームランプのおかげで車内は思いのほか明るい。

アイカ(30)、フラットシートの後部座席でスマホ片手に体操座りで縮こまっている。

同じようにコージ(34)、ハナ(43)、ミヨウジン(39)も各々小さく座っている。

アイカのスマホ画面。SNSをザッピングしていた指を止め、ふとLINEを開く。百件以上の未読通知

「S」とのトーク。「返事しろ」「殺すぞ」「逃げられると思うなよ」など通知が執拗に鳴り続ける。

無視して別のトーク「9/5自殺(5)」を開く。

メンバー一覧。ハナら、匿名アカウント五名の名前。その一人、「アイカ」を開くと、リストカットの傷がある手首の写真。アイカの手首にも、同じ傷。

フジの声「あ、酒飲みたい人いるー?」

と、狭い空間には不釣り合いな、大きい声。

アイカ、顔を上げる。

運転席のフジ(50)。片手にビール缶。顔は赤い。

フジ、助手席のホームセンターの大きな袋を掻き分けて酒の缶を取り出し、後ろに差し出す。

後部座席の面々、顔を背け、誰も受け取らない。

フジ 「なんだよ。楽しもうよ」

と、プシュッと開けて自分で飲み始める。

フジ 「じゃあさ、セックスしない? 最後まできたらセックスしたいんだけど。(アイカに) え、どう?」

アイカ、目を逸す。

フジ 「流石に俺じゃ嫌か」

と、ガハガハ笑ってコージを指し、

フジ 「じゃあ、その若いのと、そこ。試合決定。なんつって」

と、笑うが、白けているのに気づき、急に落ち着く。
フジ 「別にいいか。じゃあもうやっちゃう？」

と、袋からガムテープや、練炭の箱を取り出す。

フラットシートの中央には、七輪。

アイカ、一つ息をして、ぎゅっと目を閉じ、手首を
掻きむしる。傷から血が滲み出す。

華美なドレスワンピース姿のハナ、沈黙を破って、

ハナ 「一本だけ、飲みたい」

フジ、手を止めてニヤリと笑い、

フジ 「そう来なくっちゃ」

3. 山道の中腹・駐車スペース（夜）

夜は深まり、虫の鳴き声が大きく聞こえる。

コージ、一人外でタバコを吸っている。

4. 車の中（夜）

フラットシートの床には空き缶が二、三本。

アイカ、変わらず隅でSNSをザッピング。

ハナ 「あーもー、頭に来る」

ハナ、ビール缶片手に上機嫌になっていて、

ハナ 「百万なんて大した金じゃないよ？ でもあん時は嬉しく
てさ、自分で稼いだのが。なのにアイツに全部使われて、
パアよ」

後部座席で胡座を組んでいるフジ、爆笑。酔いはさ
らに進んでいる様子。

フジ 「何に使ったの」

ハナ 「知らないよ。なんだのかんだの風俗だの。私も子供も一
円ももらってない。あれが人生の分かれ目だよ」

フジ 「分かるわ、人の金で風俗行きてー」

ハナ 「馬鹿野郎」

と、フジを乱暴に叩く。

フジ 「いってえ」

二人、睨み合う。

フジ 「なんだよこら」

と、鼻で笑う。

フジ、仕返しにハナを殴るかと思いきや、強引に抱き寄せ、キスする。ハナ、驚いて抵抗するも、次第に受け入れたという目。缶を落とす。

アイカ、二人のまぐわいをよそに隅でスマホを弄っているが、充電が切れる。

慌てて、何度かボタンを押すが、ため息。

スマホから顔を上げると、ミヨウジンが缶ビールをちびちび飲んでいる。ふと目が合い、会釈。

フジとハナの息と声。アイカ、膝に顔を突っ伏す。軽く貧乏ゆすりし、ガリガリと手首をむしり出す。

と、バックドアが開く。

コージ、心配した顔で、

コージ「……大丈夫、ですか？」

アイカ、はたと顔を上げ、なんでもない風に頷く。

コージ、心配を解いて穏やかな顔で、

コージ「外、行きませんか？」

アイカ、戸惑って、顔を逸らす。

コージ「えっと……」

コージ、変な意味ではないと言いたげに、

コージ「(ミヨウジンに)良かったら、三人で」

ミヨウジン、突然のことで戸惑う。

コージ「さっきあつちに、ホタルいたんです。結構いっぱいいて、

その、ちょうどいいかなと思って。思い出に」

フジとハナ、組んずほぐれつの様相。

コージ「まだ、かかるみたいですし」

アイカ、フジとハナから目を逸らすようにコージと目を合わせ、頷く。

5.

山道の中腹・獣道(夜)

駐車スペースの後方には、獣道の入り口。

コージ、スマホのライトを握り、ゆっくり獣道を下って行く。

コージ「やっぱり山の方だから、まだいるんですよ」

ミヨウジン「ああ、なるほど」

と、足元に気をつけながら、おっかなびっくりでコージにゆっくりと続いている。さらに続くアイカ。

コージ「ミヨウジンさん、でしたよね」

ミヨウジン「え、ああ。一応、そうですね」

と、照れ笑いしながら、獣道を掻き分ける。

コージ、フランクな感じになって、

コージ「本名すか」

ミヨウジン「まさか。好きだったサッカー選手の名前です」

コージ「へーえ。どうしてここに？」

ミヨウジン「その、まあ上司と色々あって、嫌になって」

コージ「え、やば。パワハラとかっすか？」

ミヨウジン「いやー、それはいいじゃないですか」

と、貼り付けたように笑う。

コージ「後悔とかしないすか？」

ミヨウジン「まあ、大丈夫です」

コージ「本当にいいんすか？ 例えば、サッカー観たいとか」

ミヨウジン「あー、子供の時の話なんで、今はなんとも」

コージ「今でもなんかあるでしょ。教えてよ」

ミヨウジン「いや、ないです」

コージ「なんかあるよ。あんたみたいなのでも。いや、ないのか」

ミヨウジン「……はい、特には。あの、大丈夫です」

コージ「そっすか」

コージ、立ち止まる。

ミヨウジン、続いて立ち止まって、

ミヨウジン「え、あ？ ここですか、ホタル」

と、周囲を探す。アイカ、それに倣う。

コージ「じゃあ、もういっか」

と、振り返って、あつという間にミヨウジンを羽交い締めにする。勢いよく首に手を掛け、力を入れる。

ミヨウジン、倒れる。

アイカ、呆然。

コージ「……アイカさんは、本名っぽいっすよね」

と、ライトをアイカに向ける。

コージ「あ、安心して下さい。全然痛くないんでこれ。まだ練習中ですけど、多分痛くないと思います」

コージ、ライトで地面を照らすと、仰向けになったミヨウジンの首が、あらぬ角度に曲がっている。アイカ、腰が抜ける。

コージ「ちなみに、練炭は苦しいらしいですよ。皆んなすぐ気絶するって言いますが、車にテープ貼るぐらいじゃ密閉できないっばいっす」

と、スマホをポケットに収め、あたりは真っ暗。アイカ、立てない。

コージ「あ、立てます？」

と、手を差し伸べるが、アイカ、固まる。

コージ「え、なに？」

アイカ、ハツとして、必死に後退り。距離を取る。

コージ「あー、めんどくせ。あのさ、死にたくて来たんだよね？」

と、駐車スペースの方から、明かり。

フジの声「おーい、何やってんのそこで」

と、大きな声。

6. 山道の中腹・駐車スペース（夜）

フジ、獣道の入り口で懐中電灯をかざしている。

フジ「何？　なんかあんのー？」

7. 車の中（夜）

ハナ、乱れた衣服を直している。

8. 山道の中腹・獣道（夜）

コージ「うわ、めんどくせー」

と、入り口のフジの方を見上げる。

アイカ、ピクンと痙攣しているミヨウジンの顔と目が合ったような気がして、思わず息を呑む。

フジの声「おーい」

コージの声「こっちはこっちでやってっからー。邪魔すんなー」と、大きい声。

フジの声「はは、そりや悪かった」

と、爆笑。

コージ、ゆっくりとアイカに歩み寄る。

アイカ、大きな声を出そうとするも、息が揃わず、声にならない。

びゅっと目を瞑り、手首の傷を掻きむしる。

コージ、しゃがんで、アイカの首を掴む。

アイカ、どうにか声を絞り出して、

アイカ「……触んな」

アイカ、ビンタする格好でコージの手を振り払う。

思いのほか、強く当たる。

コージ「え、なに」

アイカ「助けて」

と、叫ぶ。

コージ「は？」

アイカの声が響き渡る。

コージ「分っかんねー」

と、急に冷めた顔。投げ捨てるようにアイカから手を離し、タバコを取り出して吸い始める。

アイカ、倒れ込む。気の抜けた顔で、仰向けになつて息を整える。眼前には夏の夜空。

(おわり)